

# “ポートフォリオ型ワークシート”を活用した小・中・高校の連携に向けた試み

## — 中学校・住居学習を中心に —

伊波富久美\*<sup>1</sup> 福良維素子\*<sup>2</sup> 山村季代\*<sup>3</sup>  
山口麻衣子\*<sup>4</sup> 中島美紀\*<sup>4</sup> 岩見ミカ\*<sup>4</sup> 篠原久枝\*<sup>5</sup>

### Attempt of Cooperative Education Between Elementary, Middle and High Schools Utilized The “Portfolio Type Worksheet” : Learning About House Life in Middle School

Fukumi IHA\*, Isoko FUKURA\*\*, Toshiyo YAMAMURA\*\*, Maiko YAMAGUCHI\*\*\*\*,  
Miki NAKASHIMA\*\*\*\*, Mika IWAMI\*\*\*\* and Hisae SHINOHARA\*\*\*\*\*

#### I. 研究の背景と目的

平成29年に告示された中学校学習指導要領では、「義務教育9年間を通じて、子供たちに必要な資質・能力を確実に育むことを目指し、小・中学校間の連携の取組を充実させる。」<sup>1)</sup> ことが明記され、「中学校学習指導要領解説 技術・家庭編」(1)改訂の趣旨「イ具体的な改善事項(ア)指導内容の示し方の改善」<sup>2)</sup> において「小・中・高等学校の内容の系統性の明確化」が求められている。

教育現場においては、学校単位での小中連携は推進され浸透しつつある。その一方で、家庭科での小中連携を実施している学校は増えつつあるが課題も多いことが、日本家庭科教育学会九州地区会・共同研究での実態調査<sup>3)~5)</sup> で明らかになった。

宮崎県では、全ての中学校が異校種間連携を実施しているとされていたが、家庭科教育での小中連携教育および小中一貫教育の取組みが実施されている学校の割合は19.1%にとどまっていた。また連携上の課題については、「小中連携の成果が見えにくい」との指摘のほか、「家庭科担当教師間の関係性が薄い」、「共同研究のための打ち合わせや参観等の時間が持ちにくい」<sup>6)</sup> などが挙げられていた。

それらの課題を解決するためには、家庭科担当教師が相互に指導内容や学習者の学びの実態についての情報共有を容易にすることが重要である。そこで伊波・山村は、「指導記録用紙」および「ポートフォリオ型ワークシート」(以下、P型シートと略記)を開発し<sup>7)</sup>、異校種間の情報共有を容易にすることで、小・中・高等学校の連携を推進しようとしている。

「指導記録用紙」は、学習指導要領および学習指導要領解説からキーワードを抜粋して、チェック項目を構成したシートであり、小・中・高校の指導内容が一覧できるようになっている。これにより、異校種の家庭科担当教師が同席しなくても、他校種の“指導内容”を容易に把握す

\*1 宮崎大学大学院教育学研究科 \*2 宮崎大学教育学部附属中学校

\*3 宮崎県立都農高等学校

\*4 宮崎大学教育学部附属小学校

\*5 宮崎大学教育学部

ることが可能になった。一方、「P型シート」は、各学習者が各授業時間において特に印象に残った内容等を記録するとともに、自己の学びによる変容を見つめることを促すワークシートであり、それらのシートをファイルに綴じ、次の学校段階に持ち上がっていくことを想定している。このシートにより教師は“学習が学んだとする内容”を把握することが容易になるとともに、「指導記録用紙」と付き合わせて活用することにより、教師が“教えたとする内容”と学習者が“学んだとする内容”とのズレの把握及びその補完が可能になる。

先行研究においては「一枚ポートフォリオ」<sup>8)</sup>が各教科で活用されている<sup>9)</sup>が、それらの開発・活用の主眼は評価に置かれていた。それに対し、P型シートは、各学習者による内容の振り返りや教師の評価における活用にとどまらず、それを次の学校段階に学習者が持ち上がっていくことで、小・中・高校の連携を円滑にしていくことを目的としている。

したがって、本研究では、家庭科における小・中・高校の連携を推進する試みとして、まず中学校の住居領域において、P型シートを活用した授業を実施し、中学生が小学校での学習内容をどのように捉えられているのか把握するとともに、その後の各時間に学習者が記述した内容と教師の意図とを照らし合わせながら学びの実態を明らかにした。それにより、P型シートの有効性と課題、および高校へ繋いでいく際の課題について明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

中学校2年生の題材「快適に住まう」(全8時間)において、P型シートを用いた授業を平成29年5月から7月にかけて実施した。本題材の指導計画は表1の通りである。

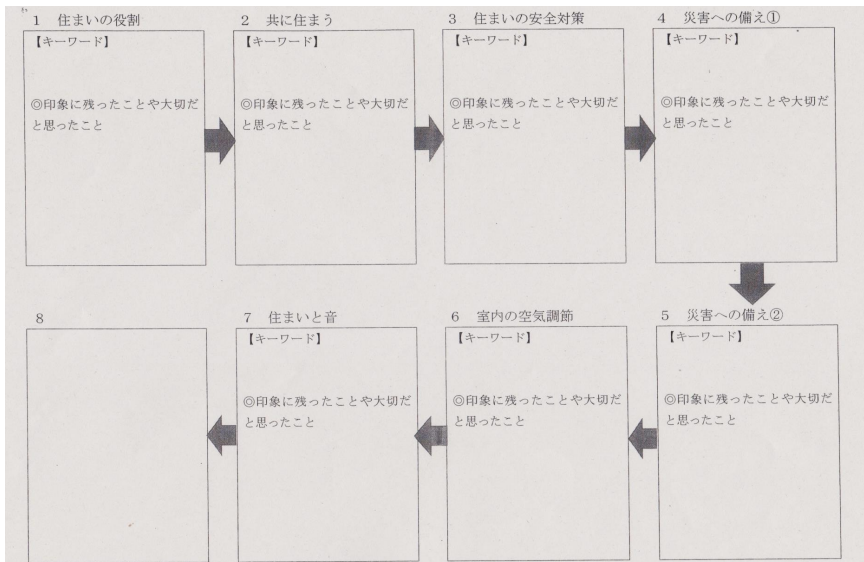
表1：題材「快適に住まう」(全8時間)の指導計画

小題材名	時数	各時の課題(教師の意図)	指導内容
第1次:住まいの役割	1	快適に生活するための住まいのはたらきや必要な住空間について考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家がないとどんなことが困るかについて考えさせ、住まいの必要性について気づかせる。</li> <li>○住まいの役割(はたらき)について考えさせる。</li> <li>○住まいに必要な生活空間について考えさせる。</li> </ul>
第2次:共に住まう	1	家族が共に心地よく住むための工夫について考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>※5人でグループを編成し、模擬家族(父・母・中学生・幼児・祖母)のそれぞれの立場の役割を分担する。</li> <li>○ある家の間取り図から、家族一人一人の状況を考え、だれがどの部屋がいいかグループで検討する。なぜ、その部屋にしたのか理由も明らかにする。</li> <li>○全体の場で発表し、それぞれのグループの考えを共有する。</li> <li>○家族の人数や生活様式によって住まい方が異なることに気づき、住まい方を工夫について考える。</li> <li>○和・洋室の特徴を知る。</li> </ul>
第3次:住まいの安全対策	1	家庭内の事故と安全対策について考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭内の事故の種類と原因についてどのようなものがあるのか知る。</li> <li>○高齢者や幼児の身体の特徴を知るために、疑似体験を行う。</li> <li>○危険な箇所をリストアップし、家庭内で安全に住むためにどうすればよいかをグループで考える。(模擬家族のそれぞれの立場で考える。)</li> <li>○グループで考えた工夫点を発表する。</li> </ul>
第4次:災害への備え① (本時)	1	自然災害に備えて住まいの安全対策や災害時の暮らしについて考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の災害対策について振り返る。</li> <li>○日頃から準備しておく備えについて考える。</li> <li>○模擬家族の立場ごとのグループに分かれて対策を話し合う。</li> <li>○話し合った対策を模擬家族の人に伝え合う。</li> <li>○「防災マニュアル」を修正する。</li> <li>○修正した「防災マニュアル」を全体に発表する。</li> </ul>
第4次:災害への備え②	1	地域とのつながりの視点から安全で快適な住まい方について考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○非常時には近隣との助け合いも必要であることに気付く。</li> <li>○避難所に住まうことになったときに必要なものや困ることについて考える。</li> <li>○避難所等での暮らしを少しでも快適にするための工夫について考える。</li> <li>○普段から地域がつながり、支え合うことが防災・減災・復興につながることを知る。</li> </ul>
第5次:快適な住まい	1	快適な住まいにするために室内の空気調節の方法や防音について考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○空気の汚れやカビの発生、近隣の住まいからの音などについて、困ったことや迷惑だったことを自分の経験から振り返る。</li> <li>○室内の空気を汚染の原因について知る。</li> <li>○生活騒音の種類と問題点について考える。</li> <li>○家族の健康に配慮した住まい方の工夫について考える。</li> <li>○近隣や地域に配慮した住まい方についての工夫を考える。</li> </ul>
第6次:家族で暮らす理想の住まい	2	家族が安全で快適に暮らせる「理想の家」を考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○模擬家族の5人が安全で快適に暮らせる「理想の家」をそれぞれの立場から意見を出し合いながら、レポートにまとめる。</li> <li>○レポートを発表する。</li> </ul>

資料1：本題材で用いたP型シート

The image shows two pages of a worksheet titled "快適に住まう" (Living Comfortably). The top left page includes a header with "2年( )組( )番 氏名( )", a section "【学習を始めるにあたって】" (Before starting learning) with a sub-instruction "☆「住まい」のイメージマップを作ろう" (Let's make an image map of 'Living'), and a large empty box with a small "住まい" (Living) label in the center. Below this are two smaller boxes with instructions: "☆ 快適に住まうために気をつけていること(気をつけたいこと)を書いてみよう。" (Write down what you are paying attention to/should pay attention to for living comfortably) and "☆ これからの学習で知りたいこと・できるようになりたいことを書いてみよう。" (Write down what you want to know/learn in the future learning).

The top right page has a section "【学習を終えて】" (After learning) with the instruction "☆「住まい」のイメージマップを作ろう" (Let's make an image map of 'Living') and a large empty box with a small "住まい" label. Below this is another section "【学習を振り返って】" (Reflecting on learning) with the instruction "☆ 快適に住まうために気をつけたいことを書いてみよう。" (Write down what you should pay attention to for living comfortably) and "☆ 学習を通して、気づいたことや考えたことを書いてみよう。さらにできるようになりたいことや調べてみたいことはありますか。" (Write down what you realized or thought through the learning. Are there any things you want to be able to do or investigate further?).



\* 授業者によるP型シートの一部変更あり

授業は全4クラスで実施したが、分析対象としたのは、1クラス36名(男子18名女子18名)のP型シートの記述内容である。本題材で使用したP型シートを資料1に示す。本研究では、【学習を始めるにあたって】の「☆快適に住まうために気をつけていること」への記述と小学校での既習内容との関連、及び分析対象とした本時(第4次)までの各時間に生徒が記述した「キーワード」と「◎印象に残ったことや大切だと思ったこと」の内容と教師の意図との関連

について分析検討した。また、授業者である中学校教師と、前校種の小学校において家庭科を指導した教師に、指導方法および分析結果について事後の聞き取り調査も行った。

### Ⅲ．研究の成果と課題

#### 1. 小学校（前校種）での学びとのつながり

本題材の学習を始めるにあたって、まず「☆快適に住まうために気をつけていること」を記入させた。その記述内容を現行の小学校学習指導要領の内容<sup>10)</sup>及び鍵となる概念別に分類した結果を図1に示す。

小学校でも、中学校と同様に内容は、「A 家庭生活と家族」、「B 日常の食事と調理の基礎」、「C 快適な衣服と住まい」、「D 身近な消費生活と環境」の4つで構成され、内容「C」の“快適な住まい”に関しては、さらに以下の二つの指導項目と、鍵となる概念が示されている。

「ア 住まい方に関心をもって、整理・整頓や清掃の仕方が分かり工夫できること。」

・・・・・・・・“整理・整頓”、“清掃”、

「イ 季節の変化に合わせた生活の大切さが分かり、快適な住まい方を工夫できること。」

・・・・・・・・“暑さ・寒さ”、“通風・換気”、“採光”

生徒は図1のように快適な住まい方を内容「C」を中心に捉えていることがわかる。なかでも“清掃”に関しては、83%の生徒が言及し、“整理・整頓”にも39%が言及していた。生徒たちにとって、快適に住まうとは、部屋の掃除や片付けに気を配ることを意味しているといえよう。その一方で、“暑さ・寒さ”、“通風・換気”、“採光”の視点から、住まいの快適さを捉えようとする意識は、低調であることが明らかになった。部屋のホコリやゴミ、散らかった様子などには目を向けるものの、それら目に見えにくいものには関心が薄いことがうかがえる。

また、小学校教師への聞き取り調査によると、小学校において当該の生徒たちは“清掃”に関して、ゴミ調べから、それに応じた掃除の仕方や工夫、実践という一連の学習を授業時間内に行っていたとのことであった。学校において体験的に学習した内容と、そうでなかった内容とで上記の差が生じた可能性も指摘できよう。したがって、中学校では、学習者があまり意識していなかった“通風・換気”など目で捉えにくい内容についての補完をしつつ、中学校での内容として位置づけられている「室内の空気調節」や「防音」等を押さえていく必要があるといえる。その際、体験的な学習活動を積極的に導入していくことも求められよう。

他方、生徒たちの記述は、内容「C」だけでなく、内容「A 家庭生活と家族」との関連も見られ、64%が言及していた。例えば、「一緒に住む人のことを思いやること」、「自分中心ではなく、みんなのことを考える」などの記述があり、快適に住まうことを他者との関わりにおいて捉えようとする傾向が見られた。これらは、中学校での「家族の住空間」の内容につながる意識として、有効に活用することができよう。

以上のように、題材の学習を開始する前に、学習対象への意識をP型シートへ記入させることで、小学校での既習内容の定着状況や関心を把握し、中学校で授業を構成する上での参考にすることが可能になったといえる。

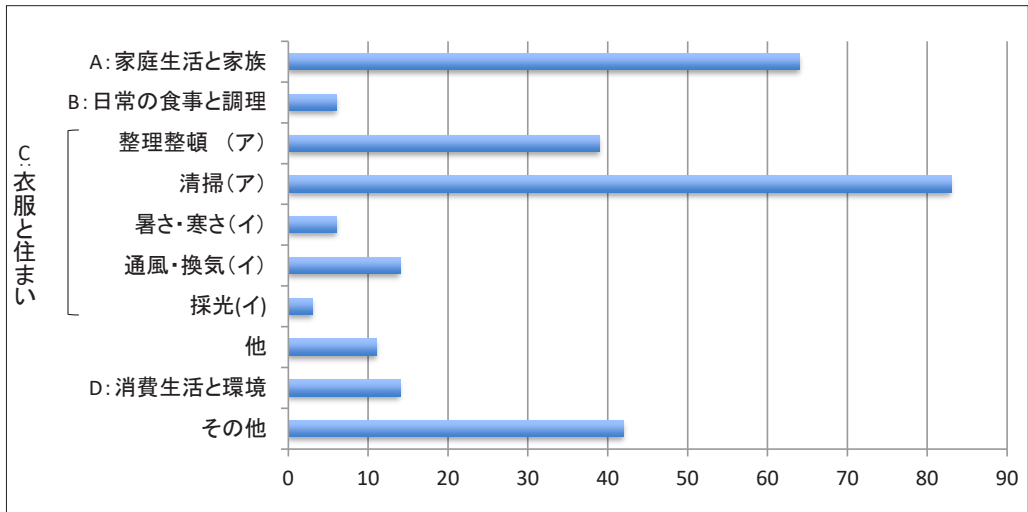


図1：「快適に住まうために気をつけていること」への記述 (\*重複解答)

## 2. 各時間の記述内容の特徴と実態把握の可能性

表2に、生徒があげた「キーワード」を示した。同じ授業を受けているにもかかわらず、各時間、生徒の挙げた「キーワード」は個々で異なり、授業の捉え方は、多様であることがわかる。例えば、第2次「共に住まう」では、教師が“家族が共に心地よく住むための工夫について考えさせる”（表1）ことを意図していたのに対して、生徒7や生徒12は、「部屋の配置」、「部屋割り」をキーワードとしてあげていたが、生徒8や生徒16は、「家族を気づかう」、「思いやり」など家族との関係に目を向けていた。同じ授業でもそれを受け取る生徒の側では、重点の置き方が各々で異なることがわかる。

また事後の教師への聞き取り調査では、これらのキーワードを概観することによって、題材の各授業時間で扱った内容の特にどこに、生徒が目を向けていたのか容易に把握できたと評価された。生徒の題材把握の実態を一目で総体的につかむのに有効であったといえる。そのように生徒の学びの実態を“簡易に”、“短時間で”、“総体的に”把握することができることは、次の学校種（高等学校）の家庭科担当者が、授業を構成していく際にも有効に活用できることが期待できよう。

表2：生徒があげた「キーワード」

	第1次:住まいの役割	第2次:共に住まう	第3次:住まいの安全対策	第4次:災害への備え①	第4次:災害への備え②
1	生活	安全	身体能力	防災	第一命
2	生活	安全・安心	身体能力	もしも	命第一
3	環境に合ったづくり	過ごしやすさ	身体的変化の対応	家族全員の理解	避難の考え方
4	心身ともに落ち着く場所	家族の状態	高齢者の立場	父親や母親がいない時の行動力	避難方法と自分達にできること
5	家族の生活	一人一人の主張	安全	一人一人の立場	避難対策
6	家	個人の主張	固定	確認	避難対策
7	割り	部屋の配置	目	備えのための予測	プライベート
8	家族と暮らす	家族を気づかう	高齢者の立場	防災	避難所の生活
9	自然条件	部屋の配置	高齢者	非常持出し品	避難経路
11	住まいの特徴	部屋割りを考える	高齢者や子供の視界	防災マニュアル	避難経路
12	快適	部屋の状況	安全	準備	安全
14	心と身体を休める	家族の状態	高齢者の立場	災害への備え	避難所での暮らし
15	役割	部屋の配置	高齢者	非常持出し品	経路
16	気候	思いやり	過ごしやすさ	備え	内容に応じて
17	快適	注意	安全	備え	避難方法
18	暮らしやすい	部屋の役割一思いに応じて	動きづらい	話し合う	しっかりと覚えておく
19	心身の安らぎ	家具の安全性	家の安全対策	なし	話し合う
20	住まい	家族の要望	それぞれの安全	防災グッズ	非常持出し品
21	安らぎ	みんなが安全に楽しく	妹・祖母の安全	非常の時には、..	みんなの心に安らぎを
22	家事・自然から守る 健康と心身の安らぎの維持	危険性・立場・家具・家族	筋力・視野=視力 安全・年齢	避難場所と道、その時の家族の人数、非常持出し品	避難方法から生活まで
23	安心	安心	安全	安全	安心
24	快適	家具	目線	備え	避難
25	団らん	条件に合った部屋の配置	苦勞	しっかりと備える	必要な物
26	健康、団らん、心身の安らぎ	思いやり、住みやすくする	安全	家族	安心
27	自然災害	相手の立場を考える	安全生活	一人一人の意識	災害の種類に応じる
28	ご飯を食べる、過ごす、風呂に入る	家具の安全性	家の安全対策	防災	非常持出し品、家族との話し合い
29	落ち着く	安全・安心	安全	確認	生き延びる
30	家族との団らん	ゆつくりできる場所	視野	家族に合った必要な物	避難方法
31	落ち着ける	安全・安心	安全	予測する	自分の安全を守る
32	雨などから守る、共同生活、個人生活	人のために	家具の配置、転倒の危険、コンセントの位置	一人一人の立場に立って考える	避難場所・方法
33	リラックスできる	過ごしやすい	安心して暮らせる	備える	災害に応じて
34	役割	安全・安心	身体的能力	話し合い	避難所生活
35	地域に合ったづくり	状況にあって使い方	身体の変化に対応する	備え確認	内容に応じて
36	心と身体に安らぎを与える 太陽光発電	部屋割り 家族の状況	高齢者、幼児、視野	非常持出し品、防災	避難場所、その後の暮らし
37	快適な生活	それぞれの人の特徴	生活にひそむ危険	その状況にあった対応	優先順位と命の安全
38	空間	家具	目線	備え	避難経路

\* 番号は生徒の識別番号

さらに、これらの「キーワード」に、「印象に残ったことや大切だと思ったこと」の内容を絡めながらP型シートを活用することによって、各時間における生徒の把握内容の実態について、教師はもう一段階、詳しく捉えることができると考えられる。

そこで、次に第4次「災害への備え①」を例に取り上げ、「キーワード」と「印象に残ったことや大切だと思ったこと」の両方の記述から、生徒が授業内容をどのように把握していたのか、教師の意図との関連で検討したい。

### 3. 教師の意図と生徒の内容把握の実態

表3に本時「災害への備え①」の指導案を示した。本時の目標は“家族のことを考えた災害への対策について考察し、災害が起きたときの対策について、実生活につながる安全策を示すことができる”ことであった。

そのため、授業では、まず自分の防災意識や対策を振り返らせつつ、自然災害に対して日頃から準備しておくべき備えについて考えさせた。その上で、班内で設定した模擬家族のそれぞれの立場（幼児、高齢者、中学生、親など）から、それらの備えの妥当性や必要性について検討させながら、班ごとに「防災マニュアル」を作成、共有させた。

この授業に対して、生徒があげた「キーワード」（再掲）と「印象に残ったことや大切だと思ったこと」の内容は、表4の通りである。

生徒の多くは、「キーワード」として、本時の題材名に含まれる「防災」、「備え」といった大きな括り（ドット部分）をあげていた。また、「家族全員の理解」、「一人一人の立場」、「一人一人の意識」など、家族各員や相互の立場（網掛け部分）に目を向けて授業内容を捉えようとした生徒は10名みられた。その一方で、「非常持ち出し品」（<>部分）のみをあげている生徒もいた。

さらに、それらの「キーワード」だけでなく、「印象に残ったことや大切だと思ったこと」の内容についても検討すると、以下の記述が見られる。「家族皆が生き延びるためには、日頃の打ち合わせが大事だと思った。」（生徒8）や、「家族の役割に合った行動や備えをし、みんなが安全に避難できるようにすることが大切。災害が起こる前に、きちんと話し合っておくことも大切。」（生徒25）と、防災を家族という視点から、家族との関わりで捉えている生徒が22名（網掛け部分）、全体の61%を占めていた。

すなわち、「キーワード」を一覧することによって、生徒が、題材全体をどのように捉えていたのかその傾向をつかむことを可能にするが、それだけでなく、「キーワード」に加えて「印象に残ったことや大切だと思ったこと」を絡めてみていくことによって、各時間において、教師の意図が伝わったか否か、確認することが可能になるといえる。また教師の意図とそれらがズレていた場合には、生徒の内容把握の実態に合った授業改善が可能になるだろう。

この授業では、“家族のことを考えた”災害対策への理解を意図していたのに対して、網掛け部分で示したように、多くの生徒は家族の視点から理解を深めていた。しかし、なかには「キーワード」のみならず、「印象に残ったことや大切だと思ったこと」においても“非常持ち出し品”や“事前の準備の必要性”への言及にとどまった生徒もみられた。したがって、教師はその結果を踏まえ、“一般的な非常持ち出し品を準備しておけばそれで終わり”ではなく、“家族員”にとって本当に必要な品になっているかという視点で検討することの重要性を強調しておく必要があるだろう。また、もしも中学校で時間が取れない場合には、このP型シートを持ち上がった次の学校段階（高等学校）において、P型シートの記述をふまえ、その視点を補完しながら、高等学校での内容を取り扱っていく必要があるといえる。そのような具体的な内容のレベルで情報を共有することが、中・高の連携をより緊密なものにしていくであろう。

表3：本時「災害への備え①」の指導案

## (1) 目標

- 家族のことを考えた災害への対策について自分の考えをワークシートにまとめ、グループ内で説明することができる。
- 災害が起きたときの対策について、様々な面から考え、実生活につながる安全対策を示すことができる。

## (2) 指導過程

生徒の学習活動	教師の支援	個に応じた手立て
1 自分の災害対策について振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自然災害への備えについて関心が高まるように東日本大震災や熊本地震についての新聞記事を提示する。</li> <li>○ いつ発生するか分からない災害への備えの必要性に気付くことができるように、台風や土砂災害などの地域でも起こりうる災害があることを説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 被害の様子が分かりやすい写真を準備し、提示する。</li> </ul>
2 本時の学習目標を確認する。  自然災害に備えて住まいの安全対策や災害時の暮らしについて考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本時の目標を確認することができるように、目標をワークシートに記入する場を設定する。</li> </ul>	
3 日頃から準備しておく備えについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 家庭内でできる災害の備え方について考えることができるように、自分の家庭で行っていることを想起する場を設定する。</li> <li>○ 準備の必要性についても理解できるように、災害時の状況などを説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 想起できない生徒については、机間指導しながら具体例を提示し、考えさせる。</li> </ul>
4 役割ごとのグループに分かれて対策を話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ささまざまな視点から模擬家族の「防災マニュアル」の修正点に気付けるようにそれぞれの立場（幼児、高齢者、中学生、親）から検討する場を設定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 話し合いが進んでいないグループには、机間指導しながらヒントや助言を与える。</li> </ul>
5 話し合った対策をホームグループの人に伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 状況により対策が変わってくることに気付かせるために、災害はいつ、どこで起きるか分からないことを伝える。</li> <li>○ グループ内で意見が共有できるようにそれぞれの立場から気付いたことや話し合った内容を班員にわかりやすく伝え合う場を設定する。</li> </ul>	
6 防災マニュアルを修正する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 修正した「防災マニュアル」を実際の生活に活かすことができるようにさまざまな視点から見直し、修正する場を設定する。</li> </ul>	
7 修正した「防災マニュアル」を全体に発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全体にわかりやすく発表できるように実物投影機に提示させる。</li> </ul>	
8 本時の学習を振り返り、まとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の家庭でも自然災害に備えて準備しておくことの大切さを意識し、実践につなげられるように、生徒の発表からキーワードをまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ワークシートの記述や板書を見て、本時の学習を振り返らせ、内容を確認させる。</li> </ul>
9 自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本時の学習の取組について振り返りができるよう、1枚ポートフォリオ評価表に記入する場を設定する。</li> </ul>	



表4：本時の「キーワード」と「印象に残ったことや大切だと思ったこと」

No.	キーワード	◎印象に残ったことや大切だと思ったこと
1	防災	もしもの時に備え、いつでも逃げられるよう準備しておくことが大切だと思った。
2	もしも	「もしも」のことをいっぱい考えて、何が起きてても対処できるように準備をすることが大事だなと思った。
3	家族全員の理解	避難場所も集合場所も家族全員で分かっているといけないので、理解し合うのが大切だと思った。
4	父親や母親がいない時の行動力	防災グッズがあるなしでは、生存する確率は大きく変わるので、家族で話し合いの時間を設ける。
5	一人一人の立場	災害はいつ起こるか分からないので、そこからみんなで話し合って、決めていくのでとても難しかった。
6	確認	家族と避難所の確認をしないといけないと思った。また、どこに逃げるかなどの確認も必要だと思った。
7	備えのための予測	本当にその物を備えた方が良いかなどをきちんと家族全員で予測しながら吟味して選ばなければならないと思った。
8	防災	家族皆が生き延びるためには、日頃からの打ち合わせが大事だと思った。「この場所は大丈夫！」と思いがち、「もしも」のために対策したい。
9	<非常持出し品>	いる物といない物の選別
11	防災マニュアル	・以外と非常持出し品が多くてびっくりした。・家族がバラバラの時に、いろんな所の電話番号が準備ということがわかった。
12	準備	カプラーマンなど、よく考えてみると、お湯をわかさないで、使えなかったりと、ちゃんと考えて準備していた。
14	災害への備え	・災害はいつ起こるか分からないので、いつ起きてもいいようにしっかりと備えることが大事。何か起きてもしもに備えを作っておく。
15	<非常持出し品>	災害の起こる前に家族で話し合い、連絡方法や避難場所・方法、を決める必要があると思った。
16	備え	実際にそうならどんな物が必要か想像することが大事だと思った。
17	備え	災害が起きた時に、きちんと話し合っていないと、持ち出し品が全てないと感じた。
18	話し合う	どこに逃げるか、どうやって？など、みんなで一つのものにしないといけない。⇒バラバラになり困る。⇒非常持出し品
19	なし	なし
20	<防災グッズ>	避難する時に、班で、何が必要か不必要などと話し合ったり、避難方法について話し合ったこと。
21	非常の時には、..	非常の時には、持ち出すものもいらぬものも分け、地震が起こった時に、スムーズに逃げられるようにしておく。
22	<避難場所と道、その時の家族の人数> <非常持出し品>	もし父がいなかったらどうするのか、もし避難場所がくずれていたらどうするのかを考えること、何があっても想定内にして、備えることが大事だと思った。
23	安全	家族と避難場所を確認しておく。
24	備え	いつ災害が起こるか分からないので、備えしておくことの大切さを学びました。また、家族で決めておくことも大切だと感じました。
25	しっかりと備える	家族の役割に合った行動や備えをし、みんなが安全に避難できるようにすることが大切。災害が起こる前に、きちんと話し合っておくことも大切。
26	家族	家族と何が必要で、どこに集合するかを話さないといけないこと。
27	一人一人の意識	自分には関係ないと思わずに、家族一人一人の意識が必要だと思った。妹やその人の立場に立って、持ち物を確認することが実際にも役立つと思った。
28	防災	いざという時の災害に備えて、家族と話し合い、連絡方法や非常持出し品などを確認しておくことが大事だとわかった。自分の家でも確認しておきたい。
29	確認	何かあった時のために、日頃から確認しておかないといけないと思った。また、いろいろなものが必要だと感じた。
30	家族に合った必要な物	家族によって、必要である物や必要でない物があることがわかった。避難する時に困らないためにも対策が必要だと思った。
31	予測する	もし〜があったら、どこに行ったり、何を持って行けばいいのかなど、家族で話し合いをすることが大事だと思った。
32	一人一人の立場に立って考える	さまざまな人が家には住んでいるので、その人に応じて必要なものを非常持出し品に入れる。連絡番号や避難場所など一つではなく、さまざまなパターンで考える。
33	備える	非常時に持ち出すときに、あまり重くない程度に、必要なものを準備しておくことが大事だとわかった。
34	話し合い	災害への備えとして、用意していたら良いものや避難の時の方法について学んだが、すべては家族の話し合いから始まるので、話し合いが大切だと思った。
35	備え確認	備えておいた方がいいものや持ち出さなくてもいいものの区別をつける。避難場所は一つだけでなく複数決めておく、避難後の行動も決めておく。
36	防災・非常持出し品	いつ起こるか分からない災害のために、家族で日頃から非常持出し品や避難場所の確認をすることが大切だと思った。
37	その状況にあった対応	実際にいろいろな可能性を考えて、防災について考える必要があると思った。
38	備え	いつ地震があっても、いつどのくらい避難するか分からないので、常日頃から防災グッズを確認することが大切。

\*1: No.は生徒の識別番号 \*2: ドットは、「備え」など大きな括り \*3: 網掛けは、家族の視点からの記述 \*4: <>は、非常持出し品等

#### Ⅳ. 研究のまとめと小・中・高校の連携に向けた課題

以上、P型シートを活用することにより、次のような有効性が示された。まず、事前に「快適に住まうために気をつけていること」を記入させたことによって、中学生が、小学校で学習した内容にどれほど意識を向け、どのように定着しているのか確認し、中学校での授業を構成する上での参考とすることが可能になった。次に、題材の各時間に記入させた「キーワード」の記述は個々で異なり、学習者の授業把握の多様性が示されたが、題材全体、および各授業時間の内容をどのように捉えていたのか、クラスの実態を短時間で総体的に把握するのに有効であった。

さらに「キーワード」とともに、「印象に残ったことや大切だと思ったこと」の記述を絡めてみていくことで、各時間の内容把握（理解度）の確認や教師の意図とのズレの把握及び修正

が可能になった。そのような実態に基づく授業の修正や補足説明は、生徒がP型シートを次の学校種（高校）に持ち上がっていくことで、次の学校種でも実施が可能になる。そのように次の学校種（高校）の教師にとっても、中学校の教師から申し送りされた「指導記録用紙」とP型シートを突き合わせてみることによって、生徒の実態を反映した既習内容の確認が容易になる。と同時に、P型シートを持ち上がることは、生徒が次の学校種において学習内容を振り返る際にも有効活用でき、教師と学習者の双方にとってメリットになることが考えられた。

他方、小・中・高校の連携に向けた課題も明らかになった。題材構成や時間配分は教師によって異なることが少なくない。そのため、それに柔軟に対応できるP型シートが必要であり、教師が独自の題材構成を容易に反映させられるフォーマットの電子ファイルを作成・提供していくことが今後求められる。

また、本研究は、大学の附属小学校と附属中学校という1対1の関係にある学校間での実践であるとともに、これまでも他領域で小・中連携教育を進めてきた実績もあり、P型シートの受け渡しや情報共有が容易であった。しかし、宮崎県をはじめ多くの教育現場では、複数の小学校と中学校が連携するケースが一般的であり、さらに中学生は多様な高校に進学する実態にある。P型シートを学習者自身が確実に持ち上がっていくかどうか不確定な部分も大きい。したがって、まずは各学校段階の授業においてP型シートへの記入を確実にし、それらを綴じたファイルを次の学校段階へ持ち上がるよう促すことが重要となる。そしてそれらが次の学校段階で有効に活用されるよう、県教育委員会単位のネットワークやメールなどを用いた「指導記録用紙」の共有やP型シートの生徒による持ち上げの実態確認など、小・中・高校の校種を超えた教師間の関係性を更に深化させていくことが今後の課題である。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省.(2017). 中学校学習指導要領. 東山書房
- 2) 文部科学省.(2017). 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編. 開隆堂.
- 3) 岡陽子, 大島和子他.(2017). 佐賀県における小中連携教育及び小中一貫教育の現状と課題—家庭科教育担当者に対する実態調査を通して—. 佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要,(1).3-12
- 4) 山村季代, 伊波富久美他.(2017). 宮崎県における小中連携教育及び小中一貫教育の現状と課題—家庭科教育担当者に対する実態調査を通して—. 宮崎大学教育学部紀要,(89),13-21.
- 5) 黒光貴峰, 伊波富久美, 大島和子他.(2017). 鹿児島県の家庭科教育における小中連携教育及び小中一貫教育の現状と課題—家庭科教育担当者に対する実態調査を通して—. 鹿児島大学教育学部研究紀要,(69).101-112.
- 6) 前掲4) pp.18.
- 7) 伊波富久美, 山村季代.(2018). 小・中・高校の学びをつなぐ「指導記録用紙」と「ポートフォリオ型ワークシート」の開発—住生活の内容を例として—. 宮崎大学教育学部紀要,(91),11-25.
- 8) 堀哲夫.(2013). 教育評価の本質と問う一枚ポートフォリオ評価OPPA(pp.20-21). 東京: 東洋館.
- 9) 中嶋他.(2016). 基礎力・思考力・実践力の高まりを評価できるOPPAを取り入れた授業の構築と実践. 宮崎大学教育学部附属中学校. 平成28年度研究紀要,40-45
- 10) 文部科学省.(2008). 小学校学習指導要領. 東京書籍.